notice

第18回「野生生物と交通」研究発表会のご案内

「野生生物」と「交通」に関わる問題は、異分野間にまたがる学際的な研究テーマであるため、その情報交換の機会が極めて少ないのが現状です。「野生生物」と「交通」に関する知識の情報交換の場として、この機会にぜひご活用下さい。多くの方のご参加をお待ちしております。現在、論文発表、パネル展示、聴講、懇親会のお申込みを受け付けております。詳しくはホームページ
http://www.wildlife-traffic.jp/をご覧ください。

「野生生物と交通」ウェブサイト

◆開　催　日：**平成31年2月19日（火）**
◆会　　場：**札幌市市民交流プラザ クリエイティブスタジオ**（札幌市中央区北1条西1丁目）
◆論 文 発 表：**無料**［平成30年12月26日（水）締切］
◆パネル展示：**無料**［平成31年　1月25日（金）締切］
◆聴　　講：**無料**［平成31年　2月12日（火）締切］
◆講演論文集：**2,500円**（開催当日発売）［予約：平成31年2月12日（火）締切］
◆懇　親　会：**4,000円**（予定）［予約：平成31年2月12日（火）締切］
◆主　　催：（一社）北海道開発技術センター
◆共　　催：（一社）エゾシカ協会・（公財）北海道環境財団
（一社）シーニックバイウェイ支援センター
（一社）アニマルパスウェイと野生生物の会、アニマルパスウェイ研究会
◆協　　力：エコ・ネットワーク

※講演論文集は、研究発表会後もエコ・ネットワークにて購入できます。（送料無料）
※講演論文集の購入に関するお問合せは、エコ・ネットワークまでご連絡ください。（TEL 011-737-7841）

お申込み・お問合せ：

（一社）北海道開発技術センター「野生生物と交通」研究発表会係（担当：向井・野呂・鹿野）
TEL: 011-738-3363　FAX: 011-738-1890
E-mail: wildlife@decnet.or.jp　ウェブサイト: http://www.wildlife-traffic.jp/

編集後記

今年の10月に我が開発技術センターにカーリング娘がやってきました！（南 真由さん：通称みなみちゃん）やってきたといっても表敬訪問とかではありません。昼間はdecで働きながら、オリンピックを目指して日夜頑張っている現役ぴちぴちカーリング選手なんです！カーリング女子がdecに入るとあって社内はにわかに色めき立ち、お昼を一緒に食べに行けば、真っ先にダイエットに効果的な運動を熱心に聞いてみたり（まずはそれ）、して盛り上がっております（笑）。この時期大変なのは、試合があるので風邪をひいても薬が飲めないこと（ドーピング問題）。なので、みなさん、風邪をひいたら移さないようにマスクしてくださいね♥12月20日（木）～23日（日）、軽井沢国際カーリング選手権大会に南ちゃん出場します！応援よろしくお願いします!!(R.W)

写真：我らがみなみちゃん（左）　チーム名は「STRAHL（シュトラール）」。ドイツ語で「輝き」を意味します。オリンピック目指して輝け!!STRAHL!!!

dec monthly vol.398
2018年11月1日発行　発行人 編集人 山口 登美男
発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター　〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL(011)738-336　FAX(011)738-1889　URL http://www.decnet.or.jp/　E-mail dec_info01@decnet.or.jp

News letter since 1985 01 NOV
Hokkaido Development Engineering Center
dec monthly
2018.11.1 vol.398　デックマンスリー

● Monthly Topic（マンスリートピック）
きた北海道エコ・モビリティ推進事業
～River×Road×Rail観光創出に向けて～
● dec Report（デックリポート）
北海道まるごとフェアinサンシャインシティ（東京都）
シーニックバイウェイ北海道『秀逸な道展』開催報告

dec Interview >>> NPO法人なよろ観光まちづくり協会　理事長　**栗原　智博 氏**

有名観光地ではない名寄にとって関係人口を増やすことが大事。積極的に情報発信しながら、「TEPPEN-RIDE（テッペンライド）」を軸に、道北全体に連携を広げていきます。

「国際雪像彫刻大会」をはじめ、道北のまちならではのイベントや物産のプロデュースに意欲的に取り組む「なよろ観光まちづくり協会」。天塩川シーニックバイウェイの活動拠点でもあり、道北全体の広域的な地域づくりの牽引役として期待されています。栗原智博理事長をお訪ねしました。

本業の建設土木会社経営の傍ら、長く名寄市のまちづくりに携わってこられました。観光との接点では、どのような活動が端緒でしょうか。

大学卒業後、父が創業した建設土木業の会社に勤務し、父が病いに倒れたため、37歳で社長になりました。まだ20代のころ、名寄青年会議所（以下JC）の会員として携わったのが「親と子のミニ雪像コンテスト」です。当時は市内の高校が荒れていたのですが、JCでは家族で取り組めるイベントを、と企画し、私は実行委員会の事務局長を務めました。コンテストは市内に約1200基の雪像が並ぶ活発なイベントに成長していきましたが、それが観光協会とかかわりを持つようになったきっかけです。

その後、観光協会で私が企画したのが、今では名寄の夏の代表的イベントになっている「てっし名寄まつり」です。夏の間にさまざまな小さな祭りが毎週のように行われていたのを一本化して集客を高めようと理事会に提案し、盛大な夏祭りとして定着しました。

観光協会は以前、市の商工観光課にあったのですが、観光の独立組織をつくるという市の方針で、2001年に、「特定非営利活動法人なよろ観光まちづくり協会」が設立されました。設立時から理事を務め、理事長になって7年目です。

名寄の冬の代表的イベントは「なよろ雪質日本一フェスティバル」。この期間中、「北の天文字焼き」とともに開催されるのが「なよろ国際雪像彫刻大会ジャパンカップ」です。

前述の「ミニ雪像コンテスト」が1989年に「北海道まちづくり100選」に選定されたのを機に、まちではもっとグレードアップした雪像大会にしようという気運が生まれました。そのときに出会ったのか北海道教育大学の伊藤隆一先生（故人）です。北方圏文化に詳しい伊藤先生の応援で、名寄JCは北方圏交流事業として91年、名寄市民によるフィンランド視察を実施。本場の国際雪像競技会に刺激を受けて名寄でも開催しようと有志で取り組み始めたのです。私自身、何度も道教大の伊藤先生を訪ねていろいろと指導いただきました。

「なよろ国際雪像彫刻大会」の初開催は2001年。今では「雪質日本一フェスティバル」（2月第2週開催）の目玉イベントになっています。近年は世界各地から約30チームの応募があり、厳選して10チームを招へい。1チーム3人が1週間滞在し、制作日数3日で作品を競います。国際水準のさまざまな競技ルールがあり、チームには必ずプロ・アーティストを含むこと、

dec Interview

くりはら　ともひろ
1956年名寄市生まれ。79年北海道工業大学工学部卒業後、父が経営する昭和産業株式会社（建設土木業）入社。93年代表取締役社長に。2001年、NPO法人なよろ観光まちづくり協会の設立とともに理事に就任し、11年から現職。天塩川シーニックバイウェイルート運営代表者会議の会長代理を務める。道北地区サッカー協会会長など幅広い分野で地域リーダーとして活躍。

雪のみで水は使わないこと、未発表作品であること、などが定められています。会場の南広場では制作段階から見物できますし、完成後、夜は作品がライトアップされ、多数の出店も出てにぎわいます。作品や制作の模様などはフェイスブックの大会ページで紹介しているので、ぜひ多くの方に見ていただきたいですね。

雪で作ったとは思えないほどの美しい彫刻作品たち（完成後のライトアップの様子）

天塩川シーニックバイウェイの活動ではルート運営代表者会議の会長代理を務め、宗谷シーニックバイウェイと連携して、旭川から日本のてっぺん、宗谷岬を目指すサイクルツアー「TEPPEN-RIDE」（テッペン・ライド）の開催を支えてこられました。

天塩川シーニックバイウェイは、中川、音威子府、美深、下川、名寄、士別、剣淵、和寒、幌加内の9市町村にわたる、道内初の道路と川が連携したエリアです。2013年に候補ルートに、17年に指定ルートになりましたが、取り組みの母体となったのは道北観光連盟（前掲9市町村の自治体、商工、観光団体が加盟）で、その事務局が名寄の観光協会であったことから当協会がシーニックバイウェイの事務局を担っています。

現在の活動の中心は、宗谷シーニックバイウェイと連携して2015年から進めてきた「きた北海道エコ・モビリティ」の展開です。自転車やカヌーなどクルマを使わずに移動を楽しむスイス・モビリティに学びながら、地域独自の取り組みを模索してきました。2016年にはスイスへの視察も行い、「きた北海道ロングライド」と題して旭川から宗谷岬約314kmを3日間かけて走るサイクルツアーを初開催。17年、「TEPPEN-RIDE」と改称し、同年、このコースは北海道開発局のサイクリングのモデルルートとして指定されました。さらに今年は新しい試みとして「R3事業」を組み入れて継続開催しました。

「R3事業」とは、リバー、ロード、レール（JR）の3つをうまく組み合わせ、多彩なモビリティでルートを楽しんでもらおうというモニター事業で、今後は宗谷本線や路線バスなどの公共交通と連携した取り組みを進めていきたいと思います。

広域サイクルイベント『TEPPEN-RIDE2017』のゴール。（宗谷岬にて）

「TEPPEN-RIDE」は旭川が出発点。今後の進展には、一層、広域の連携が大事になります。広域の取り組みと名寄単独の観光振興の両立にはご苦労が多いのでは。

シーニックバイウェイに取り組む前、上川北部の観光協会で連携しようと呼びかけたことがあるのですが、観光協会はどこもわが町のイベント開催だけで手一杯で、連携するのは困難でした。広域の活動の事務局はどこも引き受けたがらないのが実情です。しかし、今後は互いに協力しなければ、観光協会は立ち行かないでしょう。そういう意味では、シーニックバイウェイの活動のおかげで宗谷地方との連携が深まり、近年、道北がかなりまとまってきた、という実感がありますね。

旭川市や比布町とは「TEPPEN-RIDE」の展開のなかで、ぜひ連携を深めていけたらと思っています。稚内信用金庫さんや北星信用金庫さんにはすでに「TEPPEN-RIDE」に協力いただいていますが、旭川信用金庫さんを含めてルート沿いの信金さんの支店が連携して応援いただければ心強いですね。

名寄は有名観光地ではなく、大きな宿泊施設もないので、ルートをたどる人たちが少人数ずつでいいから常時、あるいは繰り返し訪れてくれる、というのが理想的です。インバウンドにあまり知られていない地域だけに「未開地」としての潜在力もあるのでは。実は、釣り人や鉄道マニア、スキー愛好家など、マニアックな名寄ファンは少なくないのです。よく観光と言えば、「隠された宝を探して、磨いて」と言われますが、最近の名寄を見ていると、このままで十分ではないか、という気もするのです（笑）。

では、今後、特に力をいれていきたいことをお聞かせください。

まずは「関係人口」の拡大です。移住による定住人口や観光で訪れる人の交流人口ではなく、道外に住む出身者やふるさと納税者など名寄になんらかの思いを寄せてくれる人たちが「関係人口」。そこに名寄の魅力を発信し続けることが最も効果的だと思っています。アスパラガスなど地元農産品や「天牛ハンバーグ」など独自の食肉加工品の販売促進については東京や札幌でイベント開催して積極的にPRしていますし、「畑自慢倶楽部」という野菜の産地直送事業も行っています。これらの事業も「東京名寄会」など名寄にゆかりある人たちとのつながりを大事にすることで顧客を増やしています。

もう一つは、最近、発足したスポーツコミッション協議会（なよろスポーツ合宿誘致推進協議会）への参加です。スポーツの大会や合宿誘致などスポーツ分野での教育活動を地域でサポートする取り組みですが、近隣の道路を活用して自転車やローラースキーの練習コースを整えるなど合宿誘致やスポーツ・ツーリズムにつなげたい。すでにスポーツバイクのレンタサイクルを行っていますが、地域のいろいろな取り組みが「てっぺんルート」の取り組み進展に結びついていけばと期待しています。私自身、体を動かすことは大好きで、今、注文したイタリア製スポーツバイクが届くのを楽しみにしているところです。

宗谷本線へ輪行（写真：左）、天塩川のカヌー体験（写真：中）、宗谷丘陵の白い道を自転車で（写真：右）。様々なアクティビティを体験を楽しみながら進めるのが、R3ツアーの魅力。

きた北海道エコ・モビリティ推進事業
～River×Road×Rail観光創出に向けて～

宗谷シーニックバイウェイおよび天塩川シーニックバイウェイは、平成27年から“超広域”連携事業として道北地域の魅力を最大化する観光プランの創出にトライしてきました（TEPPEN-RIDE〈「decマンスリー2017年8月号」参照〉）。

今夏、一級河川天塩川を中心とした「かわ」、国道40号、275号を中心とした「道」、宗谷本線の「鉄路」を舞台に道北をめいっぱい満喫する観光プランを試行的に実施しました。並行して続くそれぞれの「みち」とそれを辿りながら北を目指す「ひと」が、どのように交差し、どのように「日本のてっぺん」へと到達したか？3本の「みち」の旅を振り返ることで、両ルートの活動をサポートしてきた目線から、この“超広域”連携事業をご報告したいと思います。

きた北海道エコ・モビリティ ～両ルートが夢想し続けた旅の在り方～

道北地域の最大の長所と短所は、「原始的な大自然」と「脆弱な２次交通」です。両者は道北地域への来訪の難易度を上げ、「いつか行ってみたい」地域でありながらも来訪者のある種の覚悟が必要な地域でもありました。

そこで、それを逆手にとった観光プランの創出こそが今後の道北地域の旅の在り方だという共通理解の下、両ルートは手をつないだのです。その旅の在り方は、人力での移動×公共交通での移動そのものを楽しんでもらう旅であり、いつしかそれを「きた北海道エコ・モビリティ」と名付けたのでした。

R3への着眼 ～「きた北海道エコ・モビリティ」の神髄～

今夏の「R3モニターツアー」が実現するまでには、幾度のチャレンジの積み重ねがありました。その最たるものが、旭川から宗谷岬までの約315km、2泊3日の自転車旅-TEPPEN-RIDE-です。道北地域を満喫する手段として提案された自転車旅は、いつしかローカルサイクリストを増やし、サイクルラックやサイクルホテルといったサイクリスト・フォー・ウェルカムの風土を醸成するといった、ひとつの着火剤として道北地域に浸透していきました。

しかしながら、両ルートにとってはあくまでも通過点。「TEPPEN-RIDE」は、小さな子どもやお母さんにとって走り切れない。でも、まだまだ道北地域は多様な来訪者を受け入れる器量がある。

そこで、「TEPPEN-RIDE」とは別の風景や時間を感じることができる旅の提供がルートから期待されるようになりました。キーワードは、「River×Road×Rail」。３本の「みち」は、各々は脆弱ながらも、３本揃えばどこにも負けない。誰もがいつでもどこへでも、懐の広い道北を自由に満喫できる「みち」になる。それはまさに、「あたたかい最北の道」、「北の大河に人と自然の調和が織りなす道」。両ルートのルートテーマでした。

早朝、中川町の秘密の森へマウンテンバイクで（写真：左）。最終日の夜、稚内市内で開催「TEPPEN-PARTY」（写真：中）。エゾシカの角でクラフト体験（写真：右）。

R3モニターツアー本番！～R3だからこそ味わえるもの～

Day 1

R3モニターツアーの開催年は奇しくも「北海道命名150年」。旅の前半は、松浦武四郎が北海道を「北加伊道」と命名した音威子府村を目指しました。色とりどりのロードバイクで旭川駅を颯爽と出発したTEPPEN-RIDERSと1日目の宿泊地名寄市で再会することを約束し、R3はゆっくりとしたペースで石狩川を北上します。河川敷の自転車道に敷き詰められた落ち葉をかき分け比布駅へ。

比布駅ではサポートカーがすでに輪行の準備をしてくれていました。輪行の旨味は難所を電車で回避できるところ。その日の難所、塩狩峠も紅葉を鑑賞しながら悠々と。やはり会話は三浦綾子の『塩狩峠』。電車で峠を越え、降り立った先は剣淵町。次の名寄行きの電車が来るまで、アルパカ牧場や絵本の館などを見学。行きたいところまで自由に無理なく探索できるのも輪行旅の醍醐味です。この日のゴール地・名寄駅前よろーなでは、TEPPEN・R3合同のウエルカムパーティー。気分上々、そのまま夜の街・名寄へ。

ウエルカムパーティーでは、名物「なよろ煮込みジンギスカン」でおもてなし

Day 2

2日目は名寄駅から天塩川温泉駅までの輪行スタート。街並みの風景から美深の田園地帯へと変わっていきました。天塩川温泉で音威子府そばを堪能した後、音威子府のカヌーポートまでは天塩川に沿った脇道を自転車で風を切ります。クロスバイクにも慣れたのか、大自然の中を走ることで得られる解放感でしょうか、交通量が少ない脇道では自ずと参加者たちの自転車かけっこがはじまります。

かけっこも終わり、次は乗り物をカヌーに乗り換えます。松浦武四郎もこの風景を見ながら下った「天塩川」。ゆったりとした流れに身を任せ、野鳥の声と時折の荒波と通り雨、TEPPEN-RIDERSとのクロスオーバーに歓喜しながら前半の旅のクライマックスを迎えます。「北海道命名の地」では臨時のリバーカフェで提供されたコーヒーが、少し冷えた身体を温めてくれました。そして、TEPPEN-RIDERSとの次なる再会を中川町で！と約束します。中川町サイクルタクシーで一足先に中川町に着いたR3は街の散策の後、中川町の高台までお散歩。自分達のこれまでの歩みを確認し、森の中で火を囲み談笑を重ねました。

ゆったりとした流れの北海道遺産天塩川をカヌーで下る（写真：上）。宮崎県からのTEPPEN-RIDERSを応援するツアーもあり、みんなで一緒に、R3ツアーの仲間を北海道命名の地で迎える（写真：左）

Day 3

3日目は早起きして朝練！？からスタート。地元の人の案内で、中川町の牧場跡の森へ入り、壮大な景色の中、ゴツゴツとしたグラベルをMTBで下るのも貴重な体験となりました。秘密の遊び場を知ってしまった気分になります。天塩中川駅からは電車旅。車窓から見る、幌延町の「秘境駅銀座」に驚き、豊富町では乳牛に歓喜。トナカイ牧場でクラフト体験をし、いざ列車へ。このあたりからガラッと植生が変わり、いよいよ宗谷に足を踏み入れた実感が湧いてきます。電車旅に欠かせない駅弁（最北海幸めし）で、稚内の食を予行演習。みるみる変化する風景の中、海がみえた瞬間、ワッと車内が沸きます。

日本最北の駅・稚内駅に端到着すると、宗谷メンバーがお待ちかね。防波堤ドームや稚内の歴史を案内してくれました。ここから宗谷岬までは一度路線バスへ乗車します。地元のバス乗客と時折会話ができるのもローカル旅の良さだと実感できます。宗谷岬からは、いよいよこの旅のクライマックス！激坂を上った先に突然現れる宗谷丘陵の絶景を前に言葉を失う参加者。岬でレンタルした電動アシスト自転車が、向かい風ももろともせず、うねる周氷河地形のみちを楽しませてくれました。

宗谷岬を目指すTEPPEN-RIDERSを待ち、ゴールで感動のハイタッチ。毎日同じ場所からスタートし、同じゴール地を目指しながら、それぞれの楽しみ方で進んだ3日間。宗谷岬のモニュメントをバックに写した記念写真は思い出の一枚となったことでしょう。

「TEPPEN-PARTY」では、それぞれで参加したツアーを振り返りつつ、他のツアーの様子をスライドで共有。笑いあり、涙ありの、とってもいい時間でした！

海を背に、起伏ある宗谷丘陵も電動アシスト自転車で颯爽と走る（写真：左）。日本のてっぺん「宗谷岬」で記念撮影（写真：右）

R3の次なる目標～「やってみたかった」を「これならできる！」に～

道北地域（否、北海道）の観光形態は、これまでバスツアーが主体でした。しかしながら、昨今欧米豪をはじめとするバックパッカーやキャンピングカーによる日本人旅行者の増加から分かるように、旅の仕方の選択肢が増えてきました。彼らは主体的で自由な旅を嗜好としているようです。そのような方たちから端を発し、旅はより一般化され自由度が要求され、「私だけ」しか体験できない事柄が期待されるようになりました。つまり、旅行者も舌が肥えてきているのです。

今後、そのような飽くなき“旅行欲”を、道北ならば満たせるに違いない、という決定打が必要となってきます。その決定打として、「やってみたかった」を「これならできる！」と旅行通を唸らせる3本の「みち」の旅に磨き上げていかなくてはいけません。それぞれのRにはまだまだ課題が山積しています。ひとつひとつ丁寧に解決しながら、「また来たい」「ここに行きたい」「ここに居たい」と思える地に向けて、我々ルートコーディネーターもサポートできたらと思うところです。

文責：dec

北海道まるごとフェアinサンシャインシティ（東京都）

シーニックバイウェイ北海道『秀逸な道展』開催報告

来場者数 約4万人!

dec主任研究員　中村幸治、渡辺利奈

2018年10月12日（金）から14日（日）まで、3日間にわたり「北海道まるごとフェア in サンシャインシティ」が東京都池袋にて開催されました。噴水広場での〈PRステージ〉に加え、展示ホールAでの〈物産展〉では、肉、海鮮、ラーメンといった北海道の味覚を代表するメニューがイートインに集結。当センターからは、中村幸治主任研究員、渡辺利奈研究員が噴水広場でのPRブースにて、シーニックバイウェイ北海道「秀逸な道展」のプロモーションを行いましたので、その様子についてご紹介します。

名称：北海道まるごとフェアinサンシャインシティ
日時：平成30年10月12日（金）～14日（日）
場所：サンシャインシティ（東京/池袋）　噴水広場
主催：北海道まるごとフェア実行委員会
協力：シーニックバイウェイ北海道推進協議会／北海道地区「道の駅」連絡会
※3日間の来場者数：約4万人（※主催者発表）

秀逸な道パネル

みんなで北海道を元気に！

9月6日に発生した平成30年北海道胆振東部地震は、宿泊施設のキャンセルなど、北海道観光に影響をもたらしました。シーニックバイウェイ北海道推進協議会では、北海道観光の復興に向けて、地域活動団体及び様々な関係機関等と連携し、北海道の魅力と観光情報を首都圏で発信する取組として『秀逸な道展』を開催。そのコンセプトを“みんなで北海道を元気に！”とし、多様な連携・協働によるオール北海道体制でのプロモーション展開としました。

ステージイベントの様子

魅力ある道路空間を紹介する「秀逸な道パネル」

メインステージ上には、「世界水準」の観光地形成を目指して設定された道内15区間の「秀逸な道パネル」を展示し、美しく魅力ある道路景観等の地域資源をビジュアル的にPR。ステージイベント時は、演者後方で広告機能を持たせ、それ以外の時間帯は、自由に散策・閲覧できる展示構成としました。また、ブース内には、全道地図パネルも用意し、コミュニケーションツールとしてブース来場者にとても喜ばれました。

ブース内の全道地図パネル

大型ビジョンでの「元気です！北海道動画」の放映

シーニックバイウェイルート、北海道、北海道観光振興機構、北海道日本ハムファイターズ、道内の各自治体等と連携・収集した「元気です！北海道」シリーズの映像を噴水広場大型ビジョンで放映しました。ブース来訪者のみならず、歩行者も足を止めて見入る方も多く北海道観光の復興に向けた一つの足掛かりになりました。

大型ビジョンによる「元気です！北海道動画」の放映

シーニックバイウェイ北海道推進協議会会長の岩田圭剛氏による開会挨拶

ブース内の様子

シーニックと秀逸な道を伝える「PRステージ」

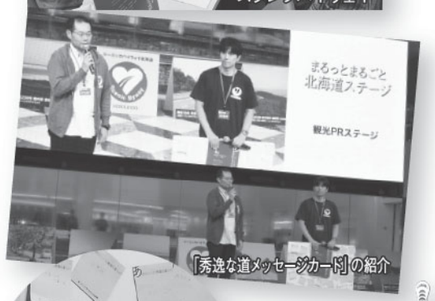
ブース出展者には、3日間で5回のPRステージタイム（15分間）が与えられており、「シーニックバイウェイ北海道」の背景や制度については北海道開発局の方々、「秀逸な道展」については、私が担当し、最後は来場者との掛け合いのもと、正解者にはドライブグッズが当たる「シーニック・クイズ」も実施。会場も盛り上がりを見せ、北海道ドライブを通じて来場者と我々との交流が図られました。

PRステージの様子

ワークショップメニュー「スタンプバイウェイ」、「秀逸な道メッセージカード」

体験（ワークショップ）メニューとして、理想の道を描くオリジナルエコバック作り「スタンプバイウェイ」や、“あなたにとって「秀逸な道」とは”を問いかけるメッセージカードを用意しました。それぞれ思い思いにスタンプや言葉を重ね、3日間の展示期間中に来訪者とともに作品を作り上げる参加・協働型のメニューとすることでブース内の一体感を育みました。

スタンプバイウェイ



「秀逸な道メッセージカード」の紹介

来場者の声：アンケートより

ブースを訪れた方を対象にアンケート調査を実施し、回答者の約8割が北海道への来訪経験があり、満足度が高いこともわかりました。また、本PRイベントを通じて「北海道へ旅行しようと思った（49.1%）」、「旅行には行けないが特産品等を積極的に購入しようと思った（22.2%）」と7割以上の方が震災後の北海道を応援したいといった意向も確認できました。その動機付けとしては、「秀逸な道パネル」、「大型ビジョンでの映像」、「北海道の人との交流」が大きく寄与していることがわかりました。

来場者から寄せられたメッセージカード

おわりに

今回、「北海道まるごとフェア」自体が初めての開催。我々にとっても初めて訪れる会場、池袋での開催ということで、展示方法やステージでのPRタイム等、来場者の動線や他の出展者のブースを参考にしつつ、試行錯誤となりました。最終的には「シーニックバイウェイ北海道」及び「秀逸な道プロジェクト」、加えて北海道の魅力と観光情報の発信、さらには来訪者と双方向で交流できた大変有意義な機会となりました。

文責：dec